

川端康成の「古都」

序／「地元力発見！」

3年半が経過した。この間に、本コラムを起草して、今回は、「地元力発見！」を文人の境遇には関係なく、現在（いま）を見つめ、己の気持ちに正直に生きる一人とともに登場する人々の描写となっている。

破／『古都』

その情景はへ美しい日本というフレーズにも合致している。『古都』はノーベル文学賞の対象作品（昭和36年）10月8日から1962年（昭和37年）1月23日まで、朝日新聞に107回にわたり掲載されたの私というテーマで記念講演を川端康成の小説『古都』を取り上げていることは、周知の通りである。筆者は当時、小学生であり、

これを知らなかったが、小説の舞台は京都であり当時の時代背景とたいのは、川端のその筆遣いについてであり、その描写と文章の美しさでもある。これについては、今回、文庫本のそれを読み直して正に感じた。



川端康成 古都

地元力発見！！

佐藤建吉 「洗楓座」代表

(53)

た人工の美しさであり、それは技や技術を通じて長年の時の継続によって裏打ちされた歴史

ているが、一方で無残な紛争地や、災害で失われて被災地となっている裏付けるように感じるの、心の美しさや優しさである。それは二人の境遇には関係なく、現在（いま）を見つめ、己の気持ちに正直に生きる一人とともに登場する人々の描写となっている。

川端の描写の美しさと同時に、

かつ着想や展開が見事である。京都の街は伝統を重んじるとともに革新の地でもある。そこには社会ではなくいい世間がある。当時の日本の懐かしいある情景を知ることができる。

その情景は「古都」を原作としてつくられた映画でも確かめることができる。2016年の作品は、時代も新しく北山杉の魅力や美しさ、現代に生きる千恵子と苗子の出会いについて、綴られている。境遇の違いはあるが二人の娘は北山杉のように真っ直ぐに育つてとして表現している。

急／北山杉&鐵の道

川端は、京都の佐々木酒造の酒が「この酒の風味こそ京都の味」と評したといわれている。その証としては、同酒造にも掲載されているが、北山杉の銘柄「古都」のラベルに川端が

筆者はかつて北山杉の里、中川を訪ねた。それは、別の新聞コラムにも掲載されているが、北山杉の絞り丸太の元祖（天然出絞）の揮毫している。筆者は、佐々木酒造中田明さんとの関りでの特別の体験であった。とりわけ北山杉の林照の打合せで何度も訪問している。同酒造は洛中、二条城の北側にあり、その地こそが京都の酒造りの起源であるという。

川端康成の『古都』は作中に京

1950年山形生まれ。

東京都立大院卒。元千葉大学大学院工学研究科准教授（金属疲労専攻）。金属疲労の研究のほか、他分野のテーマの研究開発に努めるとともに日本各地の地域おこし活動に従事する。ローカル鉄道と地元の酒蔵のコラボで地域再生を図る地酒「鐵の道」の製造・販売を企画、すでに10件を超える銘柄を送り出している。一般社団法人洗楓座代表。一般財団法人「エコミュージアムいすみ」代表。

の祭や名所などが綴られており作者自身による京都の「地元力発見！」でもあったのである。（元



林の中の北山・里山コンサート